

山畠遺跡第15次発掘調査概要

1999.3

財団法人 東大阪市文化財協会

例　　言

1. 本書は、東大阪市上四条町2038番地において、関西ハウス株式会社が計画する宅地造成工事に伴って実施した山畠遺跡第15次発掘調査の概要を纏めた報告書である。
2. 発掘調査は、関西ハウス株式会社より委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施し、芋本隆裕を担当者として平成2年4月24日から同年8月1日までのあいだ現地調査を行った。
3. 本書の執筆・編集は芋本が行い、遺構図面は内外エンジニアリング株式会社による空中写真測量図を原図とし、遺物図面は太田圭子・桑原美佳による実測図を使用した。遺物写真は(株)G.Fプロに委託して撮影したものである。
4. 本調査で出土した石棺材の鑑定は八尾市立曙川小学校奥田 尚氏によるものであり、また弥生土器の胎土についても奥田氏に多くの教示を得た。
5. 発掘調査及び整理作業には、上記の実測者のほかに補助員として美並慶久・山田正輝・柳瀬久美子が従事した。

本文目次

I 調査に至る経過.....	1
II 調査概要.....	3
1 弥生時代の遺構と遺物.....	3
1) 遺構.....	3
2) 遺物.....	3
竪穴住居跡出土遺物.....	3
包含層出土遺物.....	5
2 古墳時代の遺構と遺物.....	12
1) 山畠67号墳.....	12
遺構.....	12
遺物.....	15
2) 山畠68号墳.....	16
遺構.....	16
遺物.....	16
3) 山畠25号墳墳丘内の竪穴式小石室.....	20
遺構.....	20
遺物.....	20
4) 落ち込みとその出土遺物.....	20
III まとめ.....	21

挿図目次

第1図 山畠遺跡周辺の遺跡分布図.....	2
第2図 山畠遺跡第15次調査地位置図.....	2
第3図 竪穴住居跡実測図.....	4
第4図 山畠遺跡第15次調査地の土層断面図.....	4
第5図 弥生土器実測図.....	6
第6図 弥生土器実測図.....	7
第7図 弥生土器実測図.....	8
第8図 弥生土器実測図.....	9
第9図 鉄器実測図.....	9
第10図 石器実測図.....	10

第11図	山畠67号墳石室及び周濠実測図	12
第12図	山畠67号墳石室及び山畠25号墳小石室内出土遺物実測図	13
第13図	山畠25号墳小石室実測図	13
第14図	山畠68号墳石室実測図	14
第15図	山畠68号墳石室内出土遺物実測図	15
第16図	落ち込み内出土土器実測図	17
第17図	落ち込み内出土土器実測図	18
第18図	包含層出土土器実測図	19
第19図	山畠遺跡第15次調査地の遺構平面図	折り込み

図 版 目 次

図版 1	山畠遺跡第15次調査遺構	1 円形竪穴住居跡（調査地北半部での検出状態） 2 円形竪穴住居跡及び周辺のピット群（北より）
図版 2	山畠遺跡第15次調査遺構	1 円形竪穴住居跡の炉穴内焼土（北より） 2 山畠遺跡第15次調査南半部全景（北より）
図版 3	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠遺跡第15次調査北半部全景（東より） 2 山畠67号墳石室及び周濠跡（南より）
図版 4	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠67号墳石室床面全景（南より） 2 山畠67号墳石室床面（遺物取上後・南より）
図版 5	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠67号墳石室床面（北より） 2 山畠67号墳石室床面（南より）
図版 6	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠67号墳石室中央部の須恵器・土師器出土状況 (東より) 2 山畠67号墳石室南部の須恵器出土状況（西より）
図版 7	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠68号墳玄室内の破碎された石棺材（南より） 2 山畠68号墳玄室内の破碎された石棺材（北より）
図版 8	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠68号墳石室及び周辺の土石流堆積物（北より） 2 山畠68号墳玄室内北半部の敷石と南半部の粘土床 (南より)
図版 9	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠68号墳玄室全景（南より） 2 山畠68号墳玄室全景（北より）
図版10	山畠遺跡第15次調査遺構	1 山畠68号墳玄室奥壁と敷石（南より） 2 山畠68号墳玄室西壁の石積

- 図版11 山畠遺跡第15次調査遺構 1 山畠68号墳玄室東壁の石積
2 山畠68号墳玄室北東隅の須恵器・土師器出土状況
- 図版12 山畠遺跡第15次調査遺構 1 山畠25号墳丘内小石室全景（南より）
2 山畠25号墳丘内小石室全景（東より）
- 図版13 山畠遺跡第15次調査遺構 1 山畠25号墳丘内小石室敷石上の須恵器・刀子出土
状態
2 調査地南西部の落ち込み内土器出土状況（南より）
- 図版14 山畠遺跡第15次調査遺物 1 弥生土器 壺・婧壺・蓋、土製有孔円板・鉄製品
- 図版15 山畠遺跡第15次調査遺物 1 弥生土器 壺
2 弥生土器 壺
- 図版16 山畠遺跡第15次調査遺物 1 弥生土器 鉢・高杯・把手
2 弥生土器 高杯・脚台
- 図版17 山畠遺跡第15次調査遺物 1 弥生土器 脚台
2 弥生土器 壺
- 図版18 山畠遺跡第15次調査遺物 1 弥生土器 壺
2 弥生土器 壺
- 図版19 山畠遺跡第15次調査遺物 1 石製品 石庖丁・石槍・石鎌・石錐他
2 同 上（裏面）
- 図版20 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 蓋杯・壺・壺・土師器 盆、金環、鉄具
- 図版21 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 蓋杯・脚台・土師器 槌
- 図版22 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・高杯・壺・鉄製刀子
- 図版23 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・土師器 罐
- 図版24 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・高杯
- 図版25 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・甕・壺・提瓶
- 図版26 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 蓋杯
- 図版27 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・壺・蓋杯
- 図版28 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・壺・甕・形象埴輪
- 図版29 山畠遺跡第15次調査遺物 1 須恵器 壺・壺・高杯・蓋杯
2 須恵器 蓋杯・高杯

I 調査に至る経過

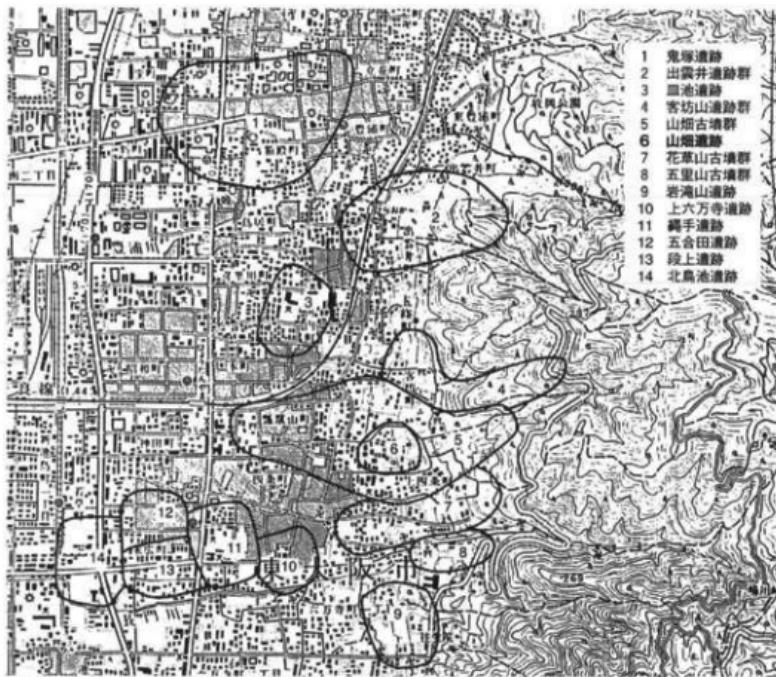
山畠遺跡は、古墳時代後期の山畠古墳群の範囲と重なって東大阪市上四条町一帯に所在する弥生時代中期の集落跡である。この遺跡は生駒山西麓の標高70~100mの高所にあって、西に向かって大阪平野を一望できる位置にあり、南は和泉山脈、西は大阪湾から淡路島、北は北摂から六甲の山並みまでを望むことができる。このような高所に営まれた集落跡は、弥生時代中期~後期の瀬戸内海沿岸から畿内地方一円を中心とする西日本に出現したことが知られ、中国の歴史書にみえる倭国内の地域間の緊張関係を反映して出現したとされるいわゆる「高地性集落」の一つとして周知されている。

山畠遺跡では、古墳の造営や田畠の開墾によって弥生時代の土器や石器を含む地層が掘り返され、これらの遺物が地表面に散布することが古くより知られていた。しかし、弥生時代の山畠遺跡についての調査は、遺物の採集が中心であり、発掘調査は昭和38年に市立郷土博物館の西方約150mの棚田の一角で枚岡考古学研究グループによって行なわれ、一辺約5mの方形竪穴住居跡の一部が検出された程度である。このほかに昭和43年に切り通しとなった道の断面に竪穴住居跡とみられる遺構が検出され、弥生土器のほか石鏃9点、石槍1点、石庖丁4点、石斧1点が出土している。

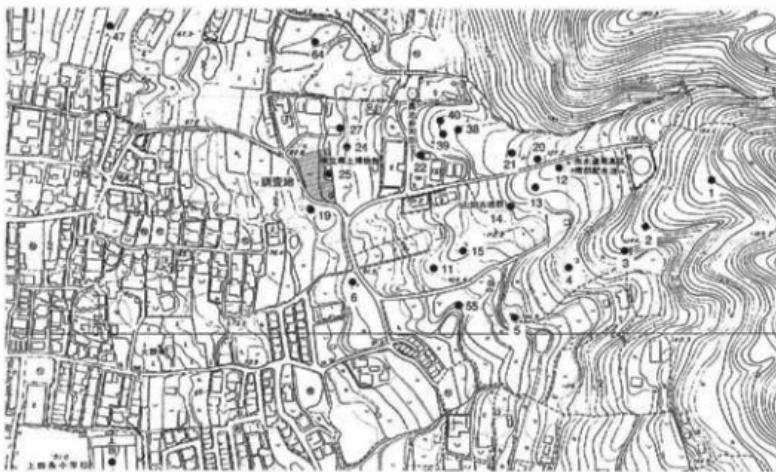
一方、付近一帯の標高30~150mの山麓斜面には古墳時代後期の群集墳として周知されている山畠古墳群が分布している。かつては80基以上の古墳が存在したとみられ、このうち40基が昭和25年以後大阪府教育委員会・枚岡市教育委員会・東大阪市遺跡保護調査会・東大阪市教育委員会等により発掘又は実測調査が行なわれてきた。今回の調査対象地にも山畠25号墳が墳丘上部を削平された状態で存在しており、昭和44年に発掘調査が行われている。その結果、無袖式の長大な横穴式石室の埋葬面が良好な状態で遺存し、組合せ式石棺と木棺による第1次~第4次埋葬が行われたことが判明し、これらの埋葬に伴う多量の副葬品が出土した。

また、付近一帯で弥生土器と共に採集された遺物のなかに、サヌカイト製の旧石器及び縄文時代早期の押型紋土器が含まれ、旧石器~縄文早期の遺構が付近に存在することも知られている。山畠遺跡は本市で最も古い人間生活の痕跡を遺す土地としても周知されるのである。

今回の調査は、周知の山畠25号墳が所在する東大阪市上四条町2038番地において関西ハウス株式会社による宅地造成計画が持ち上がり、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査の結果、弥生時代の遺物包含層や横穴式石室の一部とみられる石の存在が確認されたことに起因する。試掘結果をもとに開発事業者と東大阪市教育委員会文化財課とが協議を重ねた結果、宅地造成予定地のうち山畠25号墳の石室と墳丘部分は造成計画から除外し、残りの部分約1000m²について事前の発掘調査を実施することとなった。また、この事前調査によって古墳の石室等重要な遺構が検出された場合は、遺構保存について協議することでも双方が合意し、これに基づいて調査で検出された山畠68号墳石室は建物基礎で壊されないよう設計が変更された。



第1図 山畠遺跡周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第2図 山畠遺跡第15次調査地位置図（1/5,000）

II 調査概要

発掘調査を実施するにあたっては、掘削土の置場を確保するために調査地を南北に二分し、北半部の調査を実施したのち南半部の調査を行った。また、これらと並行して保存されることが決まっている山畠25号墳の墳丘部分についてもトレンチ調査を実施した。

調査地は、東から西にむかって緩やかに下降する旧畠地であり、旧耕作土の下に灰褐色土と暗褐色粘土混じり灰褐色土が調査地東端で約20cm、西端で約1mの厚さでみとめられる。この2層は共に棚田造成時の客土層とみられる。この客土層の下には、土石流堆積物とみられる黄褐色礫混じり粘土が分厚く堆積している。この層の上面にて、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟、横穴式石室をもつ古墳2基が検出されたが、この堆積層には直径0.3~1m以上の巨礫が多数含まれ、地層上面にもこれらの礫が無数に露出している。

1 弥生時代の遺構と遺物

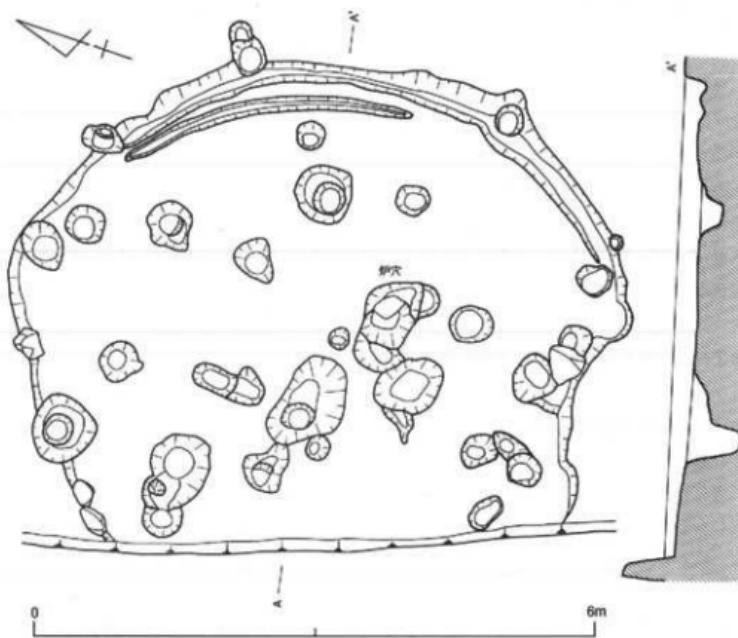
1) 遺構

南北に二分した調査地にまたがって直径5.8m・深さ0.4mを測る円形竪穴住居跡を1棟を検出した。竪穴の西部は調査地外の市道下に位置するため未調査であるが、床面の約4/5を発掘し、柱穴多数と炉穴、壁溝などが検出された。このうち主柱穴とみられるものは、直径30~40cm、深さは50~70cmを測る深いものが円形に並んでいる。穴の底に残された柱の痕跡から直径20cm程の柱であったことが知られる。検出された柱穴には、竪穴の周壁沿いに等間隔に並ぶもの、周壁より1m程内側に円形に並ぶもの、その他不規則なもの等があつて、前二者はこの竪穴に伴うもの、他の不規則な柱穴はこの竪穴と重複する別の竪穴住居跡のものと考えられる。この竪穴の東側に別の柱穴群が円形を描くように分布することや、その部分に巨礫の露出がほとんど無いことなどからも、すでに削平された竪穴住居跡の存在が示唆される。検出された竪穴住居跡は、周壁の輪郭がやや流れた部分もみとめられる。比較的残りがよいのは東壁の一部で、周壁沿いに浅い溝が2重にとりまく状況が看取される。ほんらいは周壁に沿った全体にこうした壁溝が掘られていたものと思われる。壁溝の用途は、壁材の下部を固定したのか、排水のためかのいずれかであろう。竪穴床面の中央部よりやや南に焼土面がみられる。焼土は厚さ5cm程度で堆積し、その下に深さ60cmのピットを検出した。このピット内には炭が疎らに含まれる埋土が充填されている。この住居跡は周壁に沿って柱穴が並ぶことから、現在みられる周壁の外側に一段高いテラス状の部分が存在した可能性がある。この住居の営まれていた年代は、竪穴内より出土した土器より弥生時代中期末(IV期)と考えられる。

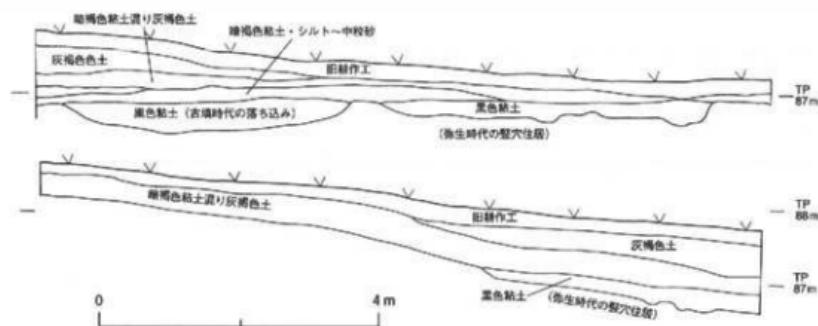
2) 遺物

竪穴内出土遺物

竪穴内からは、口縁端部に凹線紋、肩部に渦巻きのスタンプ紋と刺突列点紋を施し、左上り



第3図 穂穴住居跡実測図 (1/60)



第4図 山畠遺跡第15次調査地の土層断面図 (1/80)

のタタキ目もみられる壺25、非河内産の飯蛸壺23、上方に拡張した口縁部に櫛描による交差斜線紋を施した広口壺12、口縁端部に多数の円形浮紋を貼り付けた小型の広口壺18、壺蓋17、口縁部が短く水平に外反する壺61・64、脚台部73等が出土した。いずれも弥生時代中期末(IV期)の畿内第IV様式に比定されるものである。土器の他には、堅穴床面より掘込まれた柱穴内より幅0.8cm・長さ4.0cm・厚さ0.2cmを測る細長い鉄器片が1点出土している(第9図)。その形状より、この鉄器片は鑓または鍔の一部の可能性がある。また、石庖丁90・石鎌92・サヌカイト片98なども堅穴内より出土した。石庖丁は平面蒲鉾形で片面より研ぎ出した直線刃をもつ。刃面を上にして右端を一部欠損するだけの長さ14.3cm・幅4.2cm・厚さ0.7cmのはば完形品。中央に紐孔2孔が穿たれている。石鎌は長三角形の凸基式有茎鎌で、先端及び茎端部を欠損する。現存長3.3cm・幅2.5cm・厚さ0.4cmを測る。

包含層出土遺物

弥生時代の遺物には土器・土製品・石器などがある。これらは古墳時代の遺物とともに出土した。弥生土器には壺・甕・鉢・高杯・器台・壺蓋・甕蓋等の器種がみとめられる。これらの土器は堅穴内出土土器と同じく畿内第IV様式に属するものである。その大半は土器胎土に角閃石を多量に含むいわゆる生駒西麓産の土器で占められ、角閃石を含まない他地域産の土器は極く少数である。本遺跡が角閃石を多量に含む閃緑岩の分布地帯のなかに位置していることから、こうした土器胎土の識別は東大阪市内の他の遺跡よりも比較的容易である。いっぽう、土器の表面にみとめられる製作時の調整痕は埋没環境にもとづく風化により磨滅が著しく、判別し難いものが多い。以下、器種ごとに出土土器を概観する。

壺(1~11、13~16、19~22、24~29)

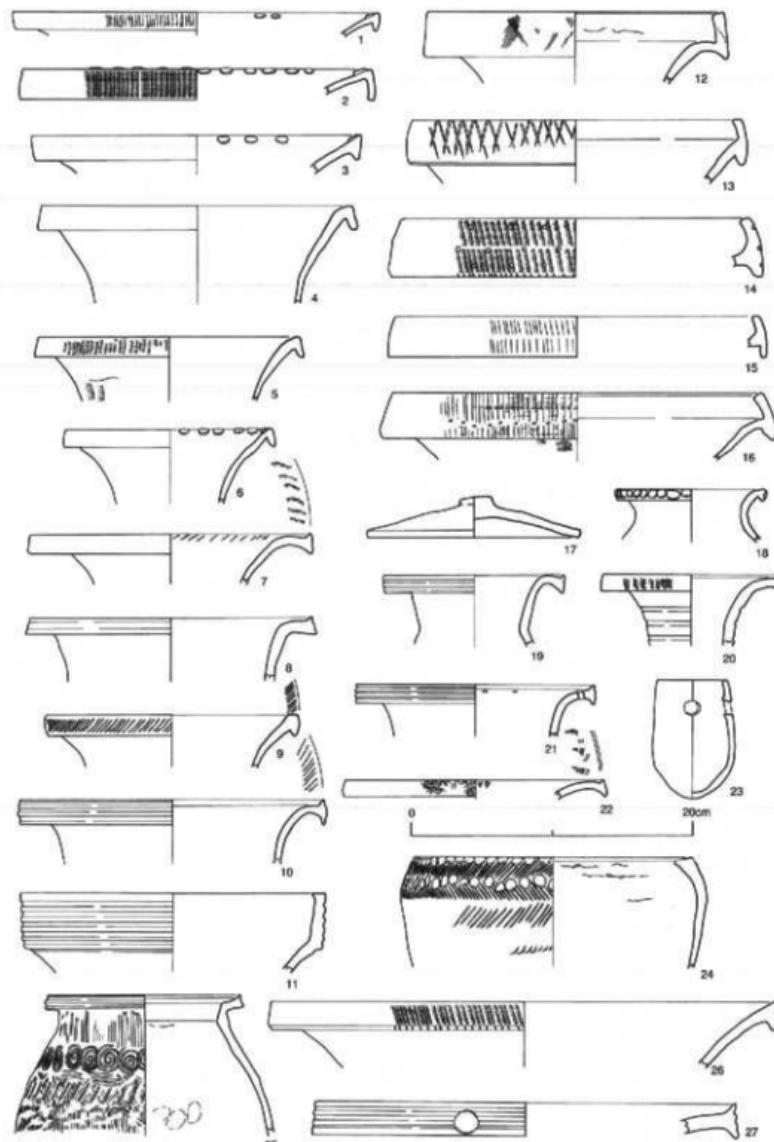
広口壺、大型細頸壺、無頸壺などがある。広口壺1~6・26は、口縁端部を下方に拡張し、外面に簾状紋を施すもの。内面に円形浮紋を貼り付けるものや無紋のものも含まれる。広口壺13~16は口縁端部を上方にも拡張し、外面に簾状紋や斜線紋を施すもの。広口壺7~10・18~22・27は口縁端部を上下に肥厚させるもので、外面に凹線紋・波状紋・斜線紋・円形浮紋などを施し、内面に列点紋・扇形紋を施す。22の胎土は非河内産。頸部に凹線紋をもつ小型の壺20は口縁外面にこの種の壺には珍しく簾状紋を施している。

24は、口径20cmを測る大型の細頸壺の口縁部。口縁部の大きさよりみて、胴部は最大径が1mちかいものと思われる。ゆるく内湾する口縁部をもち、口縁部外面に簾状紋崩れの列点紋を2帯施す。この2帯は主軸を遠て杉綾状に施紋され、その上に円形浮紋を2列にわたり多数貼り付けている。

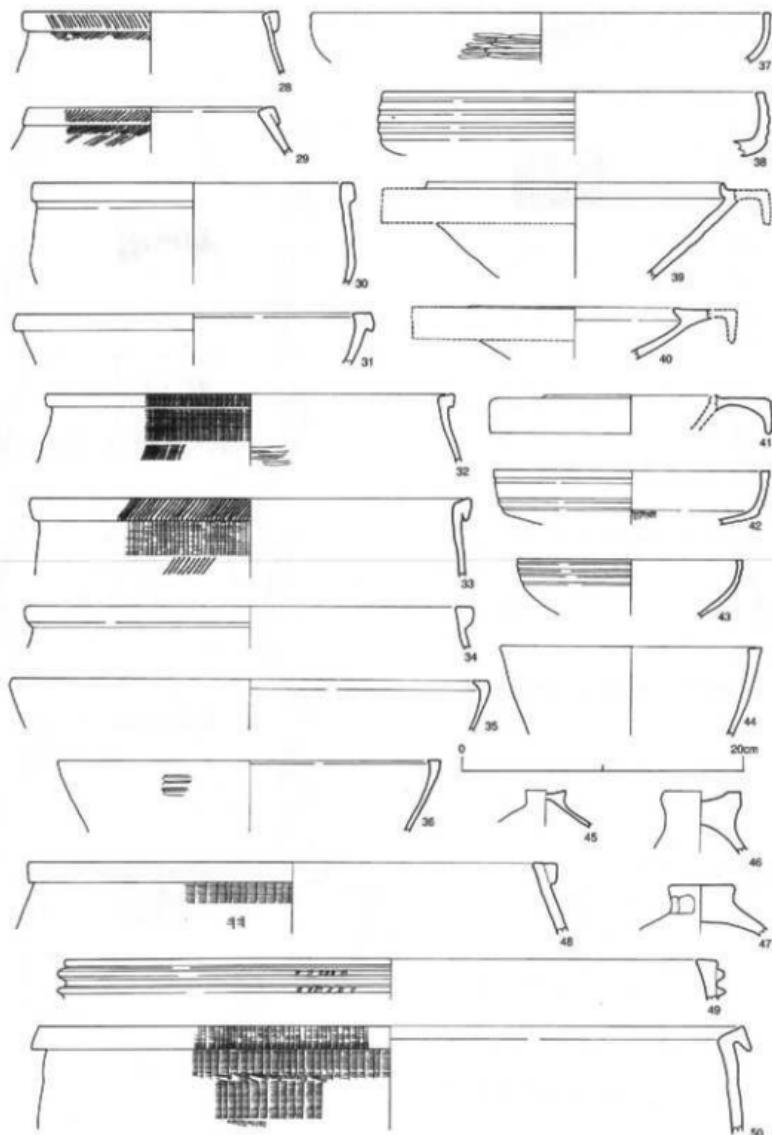
28・29は、口縁端部外面を折り返し又は粘土帶貼り付けにより段状口縁とする無頸壺。口縁部と胴部の外面に簾状紋崩れの斜め列点紋が細かく施されている。

鉢(30~36・44・48~50)

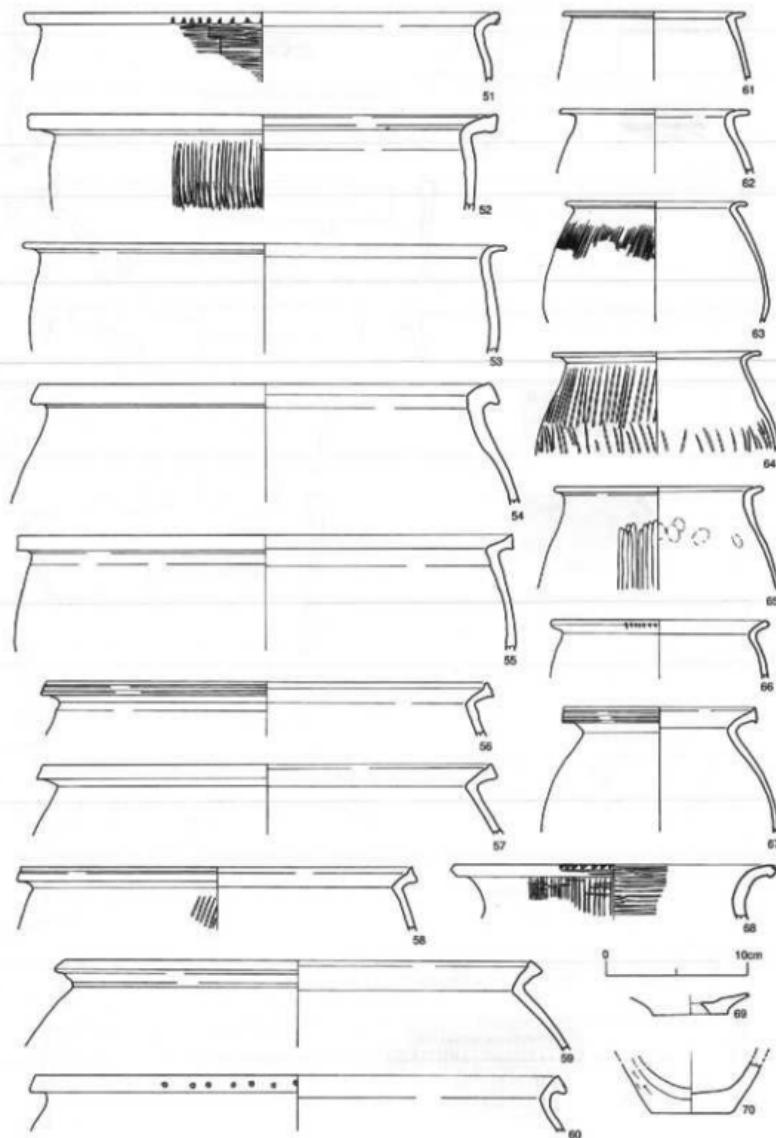
腰の張った体部をもつものと半球形の体部をもつものとがある。前者は、口縁部を折り返し又は粘土帶貼り付けにより段状を呈し、口縁部・体部外面に簾状紋や扇形紋、簾状紋崩れの列



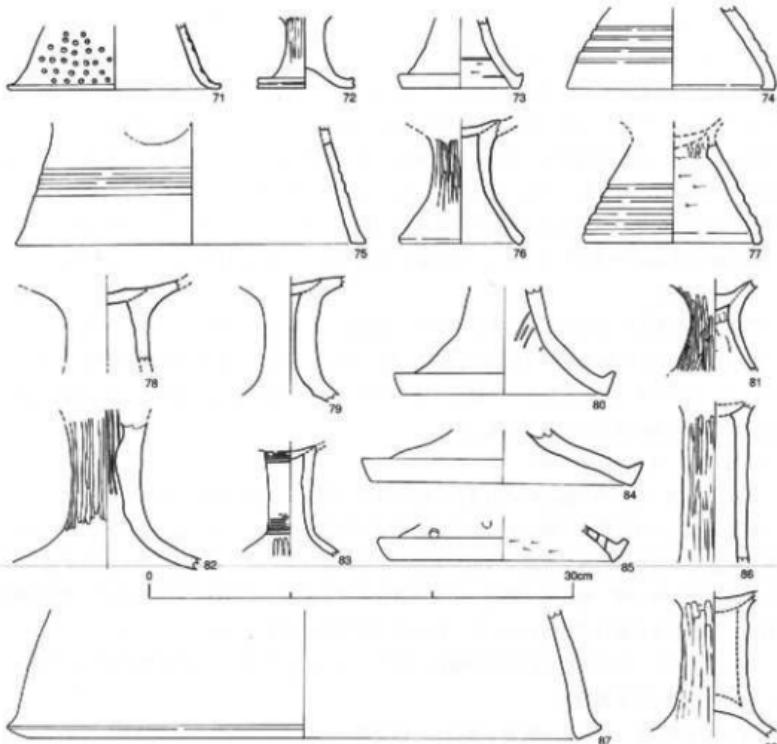
第5図 弥生土器実測図 (1/4) 壺・蓋・鉢



第6図 弥生土器実測図 (1/4) 無頸壺・鉢・高杯・蓋



第7図 弥生土器実測図 (1/4) 瓢



第8図 弥生土器実測図(1/4) 器台・脚台

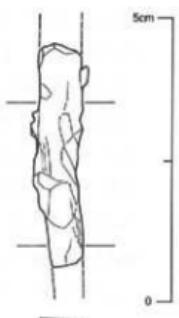
点紋を施すほか、無紋の場合もある30~34・48・50。31は同様の口縁をもつが半球形の体部をもつ無紋の鉢で胎土は非河内産。半球形の体部をもつ鉢の多くは、口縁端部が内側に若干肥厚するもので、49は刻目凸帯を貼り付けるが35・36・44は無紋である。

高杯 (37~43)

浅い椀状を呈する杯部をもつもの37・38・42・43と、口縁部が水平に張り出し端部を下方に拡張するもの39~41がある。39の胎土は非河内産。浅い椀状杯部の口縁部外面に凹線紋を施すものが多い。

蓋 (45~47)

蓋のつまみ部分のみ出土した。このうち45は蓋蓋、46は甕蓋とみられる。



第9図 鉄器実測図(1/1)

壺 (51~68)

51~57・59・60は大型壺。口縁部は端部が上方に肥厚するもの、下方に折り曲げたもの、拡張せずにおわるものなどがある。装飾としては口縁端部に刻目51、凹線56、刺突60などがみとめられる。58・68は中型壺。68は口縁部がゆるく外反したのち端部がさらに反転する形状と目の粗いハケメによる外面縦・内面横方向の調整、口縁端部へのハケメ原体による刺突などの特徴からいわゆる大和型とされるものである。胎土は非河内産。61~67は小型壺。口縁部は短く外反するものが多いが、67は口縁端部を上下に肥厚させ、外面に凹線がめぐる非河内産のもの。

底部69は焼成前の穿孔をもつもの、70は胴下部に焼成前の大型円孔をもつものである。

器台 (75・87)

75はゆるく裾が広がる円筒形の器体をもち、体部に円窓を穿ち、裾部に3条の凹線をめぐらすもの。裾部復原径約25cmを測るこの土器は、器台の他に台付鉢の脚台の可能性も考えられる。87は「ハ」の字形の裾部形態をもつ器台。復原径約42cmを測る大型品であるが、これも前者同様に大型台付鉢の脚台の可能性もある。

脚台 (71~74・76~86・88)

72・73・76・78~86・88は細い円柱状の脚柱部から裾部が広がる脚台。脚柱部が中実のもの72もあるが、大半は円板充填により中空の脚柱部と杯部を分けるものであり、88のように脚柱部と裾部との境にも円板を充填する例もある。中空の脚柱部には、内面をヘラケズリするもの73・76・78・80・81・83~86・88と、しづり痕をそのまま残すもの79・80がある。83の脚柱外面には櫛描き直線紋が施されている。76・82・83の胎土は非河内産。

74・77は「ハ」の字形の裾部をもつ脚台。裾立ちかくの外面に4~5条の凹線がめぐらされている。74の胎土は非河内産。

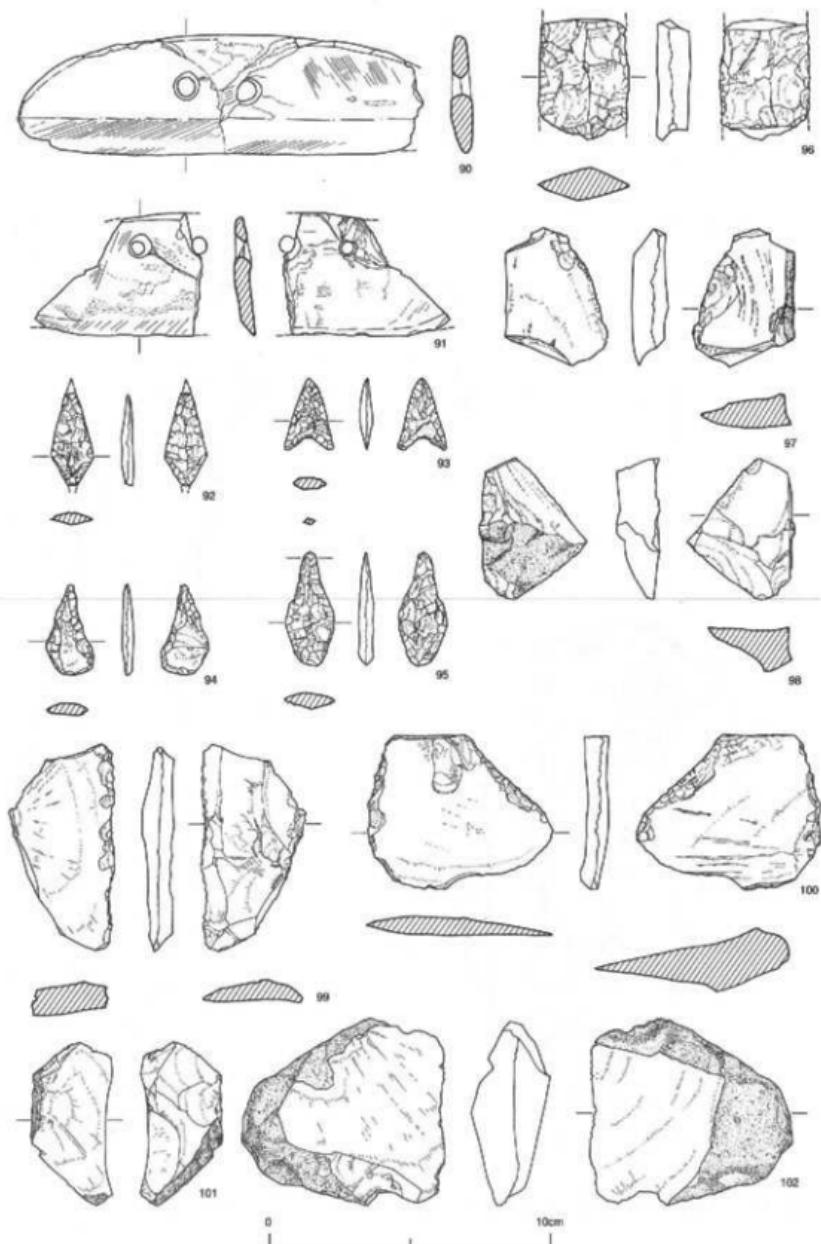
71は裾端部立ちかくのみ短く広がる脚台。外面全体に竹管による刺突多数が施されている。

土製品 (167・168)

167は簾状紋を施した土器片の転用品。周縁を打欠き、中心に円孔を両面より穿った有孔板である。周縁の成形が粗いため円形を呈さない。3.5cm×3.7cm、厚さ0.6cmを測る。168は円板状土製品として製作されたもので、径約5cm、厚さ0.6cmを測り、中心に円孔を穿っている。

石器 (91・93~97・99~101)

竪穴住居内の他に、包含層からも石庖丁・石鎌・石槍・石錐等の石器が出土した。91は石庖丁で二次的な火熱を受けている。現存長5.7cm・幅4.4cm・厚さ0.6cm。93~94はサヌカイト打製石鎌。93は三角形凹基式で長さ2.6cm・幅1.7cm・厚さ0.4cm。94はやや歪な長三角形平基式。長さ3.2cm・幅1.7cm・厚さ0.4cm。95は石錐の可能性が高いもので長さ4.1cm・幅1.7cm・厚さ0.5cm。96は打製石槍。上下は欠損する。現存長4.3cm・幅3.2cm・厚さ1.2cm。97~99~101はいずれも一部にサヌカイトの原礫面を残すが、両面より打撃を加えて刃部を作り出したものである。



第10図 石器実測図(1/2) 石庖丁・石槍・石鎌他

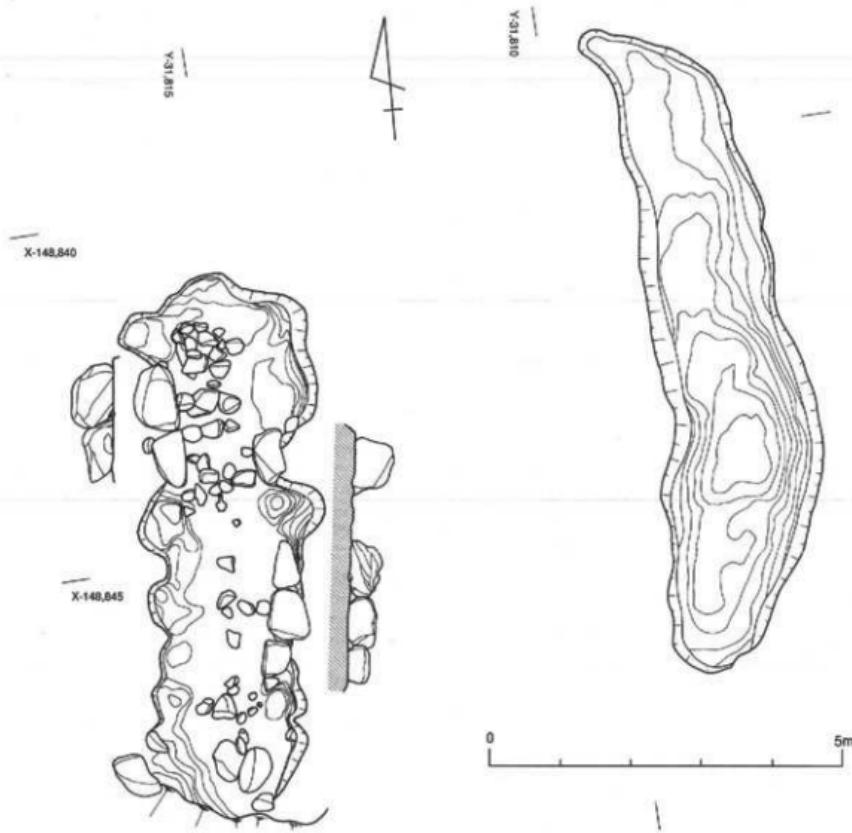
2 古墳時代の遺構と遺物

これまで存在が知られていなかった横穴式石室を内部主体とする古墳2基を検出したほか、山畠25号墳の墳丘内より竪穴式小石室1基、調査地南部より土器多数を含む落ち込み1カ所などの遺構を検出した。

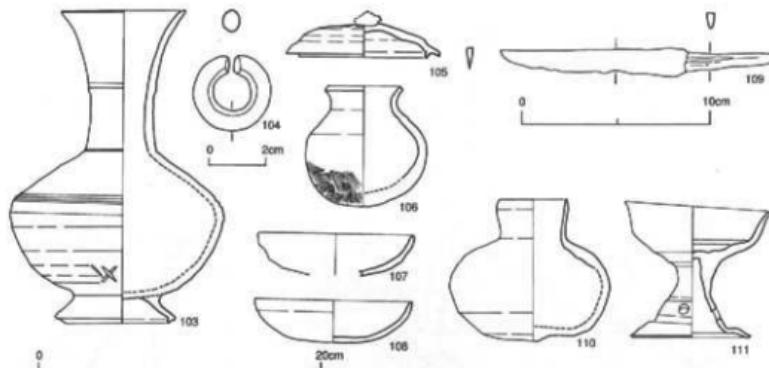
1) 山畠67号墳

遺構

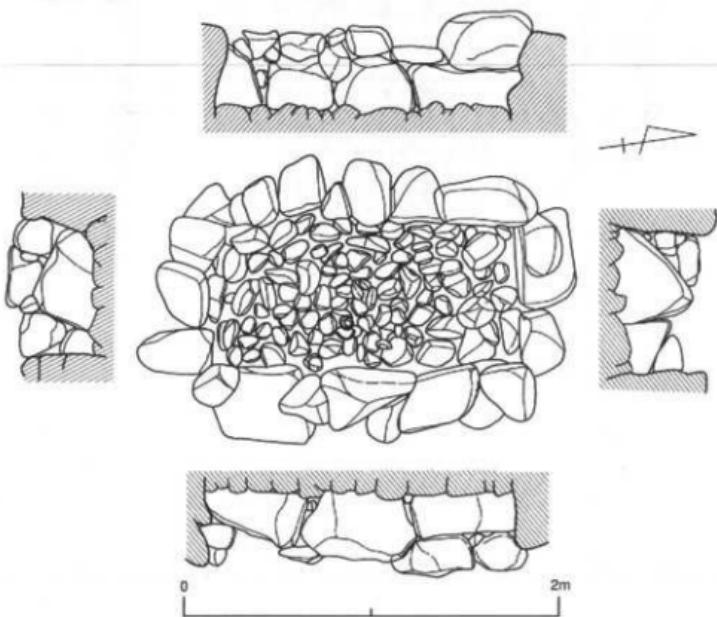
すでに墳丘は削平され、横穴式石室の最下段の石組みの一部のみを残すものである。調査地



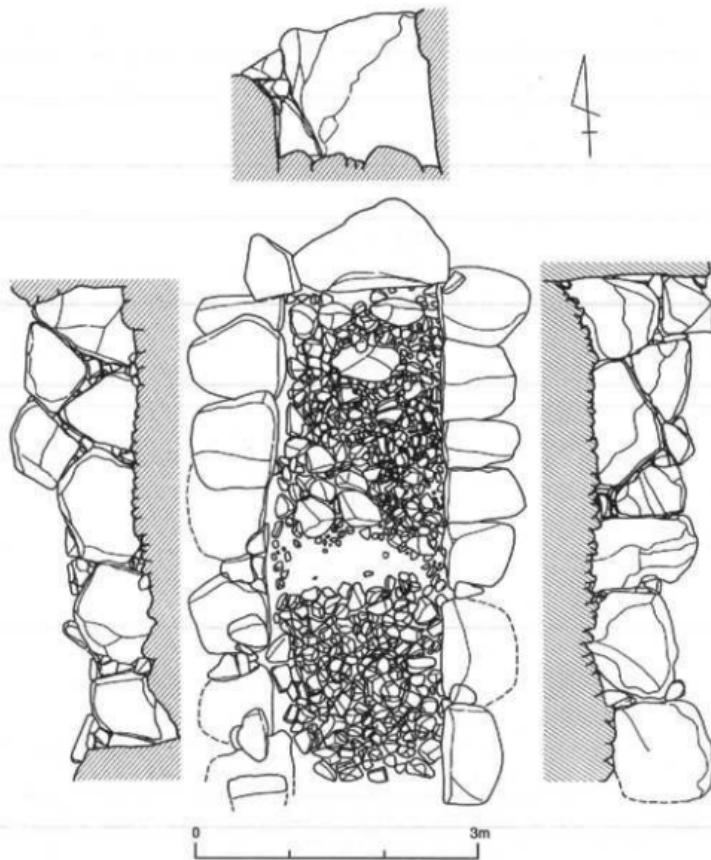
第11図 山畠67号墳石室及び周濠実測図 (1/80)



第12図 山烟67号填石室内及び山烟25号填小石室内出土遺物実測図 103~108 山烟67号填出土 須恵器壺・塙・蓋, 土師器杯 (1/4), 金環 (1/2) 109~111 山烟25号填小石室出土 須恵器塙・高杯 (1/4), 刀子 (1/3)

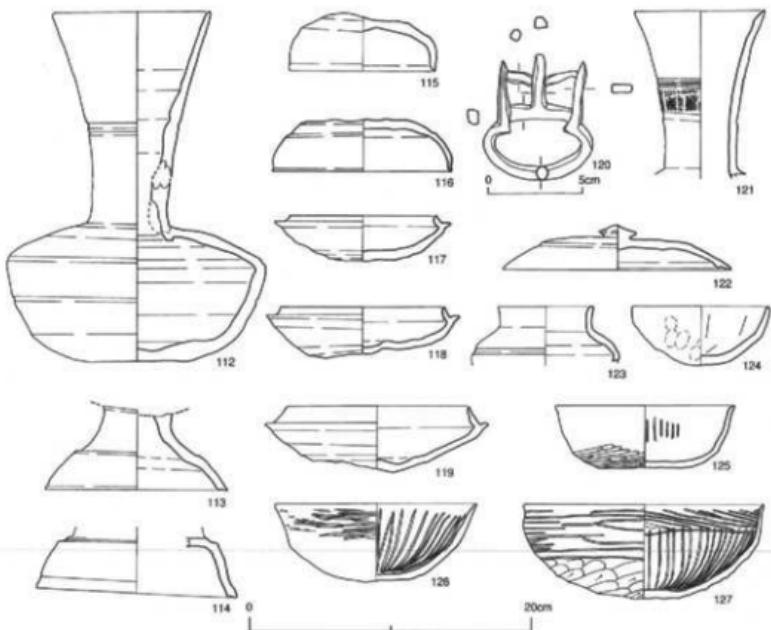


第13図 山烟25号填小石室実測図 (1/30)



第14図 山畠68号墳石室実測図（1/60）

北西部において検出された。石室の石組みの大半が失われているが、石の抜跡より玄室の幅約1.1m・全長7~8mを測る小型の左片袖式石室と推定される。玄室床面には、棺台とみられる石数個と鉄釘が出土し、木棺による埋葬が知られる。奥壁近くの床面からは、この埋葬に伴うとみられる頭骨の一部と金環1個が検出された。頭位を北に向けた埋葬が行われたことを示すものである。棺台が検出された床面から約5cm掘り下げると、玄室に敷石が現われた。この敷石は、棺台の置かれた面より古い埋葬に伴うものかとみられるが、敷石上にその痕跡がみとめられないところから、あるいは後記する山畠68号墳の石室と同じく敷石の上に貼土を行ったのちに埋葬する形態がとられたのかも知れない。木棺が埋葬された時期は、頭骨の横で検出さ



第15図 山畠68号墳石室内出土遺物実測図 須恵器壺・蓋杯・塙、土師器杯・椀(1/4),鉢具(1/3)

れた須恵器杯と木棺のすぐ南に置かれた須恵器長頸壺の型式より7世紀初頭と考えられる。

石室の東約7mには、幅約2m・深さ0.5mの溝が10m程の長さで弧状に取り巻いて検出された。この溝は古墳築造の際に掘られた周濠の一部とみられ、本古墳が直径約15mの墳丘を有していたことを示すものである。

遺物

須恵器103・105・106、土師器107・108、金環104などが出土した。蓋105は直径11cmの小型の蓋で、天井部中央に宝珠つまみの剥離痕がみられる。長頸壺103は器高22.2cm・口径8.7cm・胴部最大径15.1cmを測る完形品。底部に「ハ」の字形の短い脚台がつく。口頸部中央と頸胴部境にそれぞれ1条の凹線を施し、肩部に2条の凹線を施す。また、胴下部にはヘラ記号紋が施されている。塙106は球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。器高8.6cm・口径5.5cm・胴部最大径8.6cmを測る完形品。羨道入口部より出土した。

金環104は鍍金の剥離が著しいが直径2.7cmを測る完形品。土師器杯107・108のうち108はは

は完形品。共に羨道部より出土した。

2) 山畠68号墳

遺構

すでに墳丘は削平され、横穴式石室の最下段の石組みと一部2段目の石組みを残すものである。調査地南端部においてN10°Wを主軸とする左片袖式の玄室が検出され、羨道部分は調査地外の市道部分に続いている。この古墳の石室は、玄室の幅1.7m・長さ4.7mを測る。山畠古墳群の石室としては中型に属するものである。使用する石材は、奥壁に割石を用い、側石には平坦な面を有する自然石を用いて石組の隙間もすくない特徴をもつ。こうした石組は、切石積の横穴式石室にちかいことから自然石を用いた横穴式石室としては新しい段階のものと考えられる。

石室内は、後世の埋土により充填されていたが、その下には石棺材とみられる凝灰岩の破片多数が散乱していた。これらの破片は、土圧や自然風化に伴って破片となったものではなく、人為的に細かく割られた状態を示しているが、これが盜掘によるものか、古墳を削平整地した際に行われたものかは判断し難い。

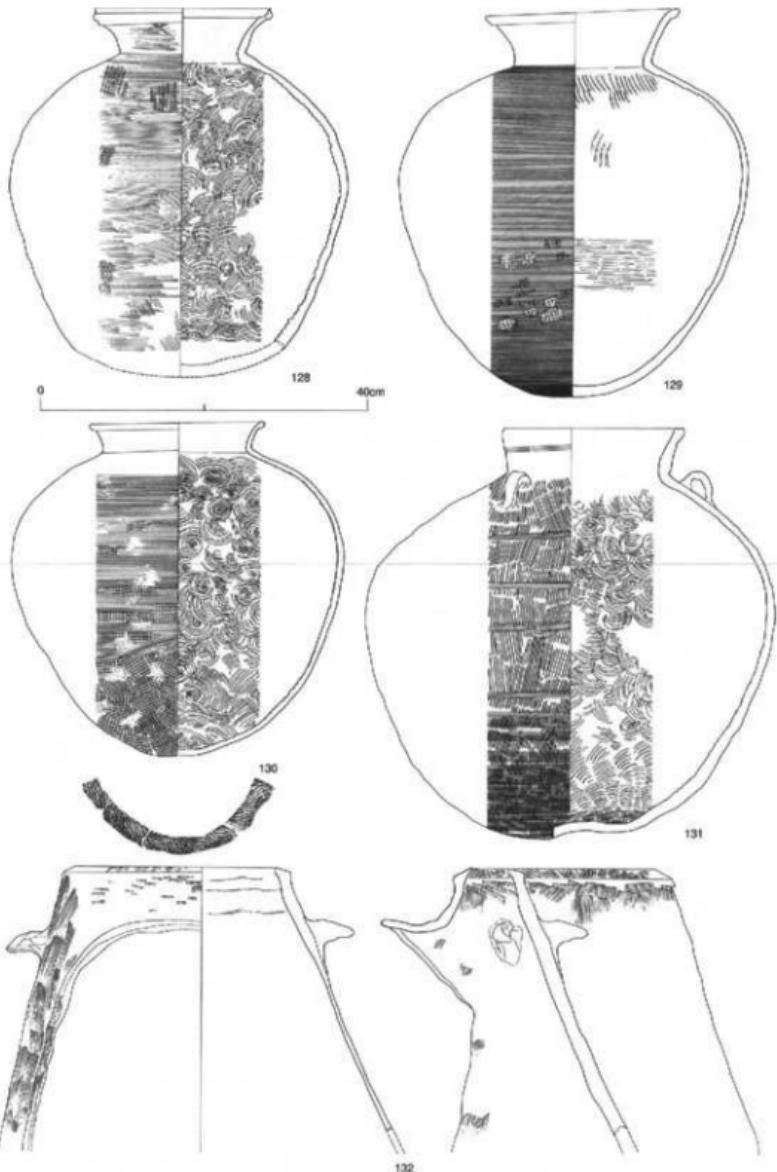
石棺に使用された石材は、肉眼によって明らかに材質の違う2種類の石材に分けられる。肉眼による石材鑑定により、多数を占める灰白色を呈し石質のきめがやや粗い石材は二上山産で、少数の黄灰色で石室のきめが細かい石材は兵庫県龍山産と考えられるものである。(奥田尚氏の教示による)。

これら2種類の石棺材は、石室内に複数の石棺が存在したことの証左ともみることができるが、龍山産の石材数が一つの棺を組合せるには少なすぎることから、あるいは東大阪市六万寺町の桜井1号墳出土の石棺底板のように一つの石棺を産地の違う石材によって組合せた可能性も指摘できる。

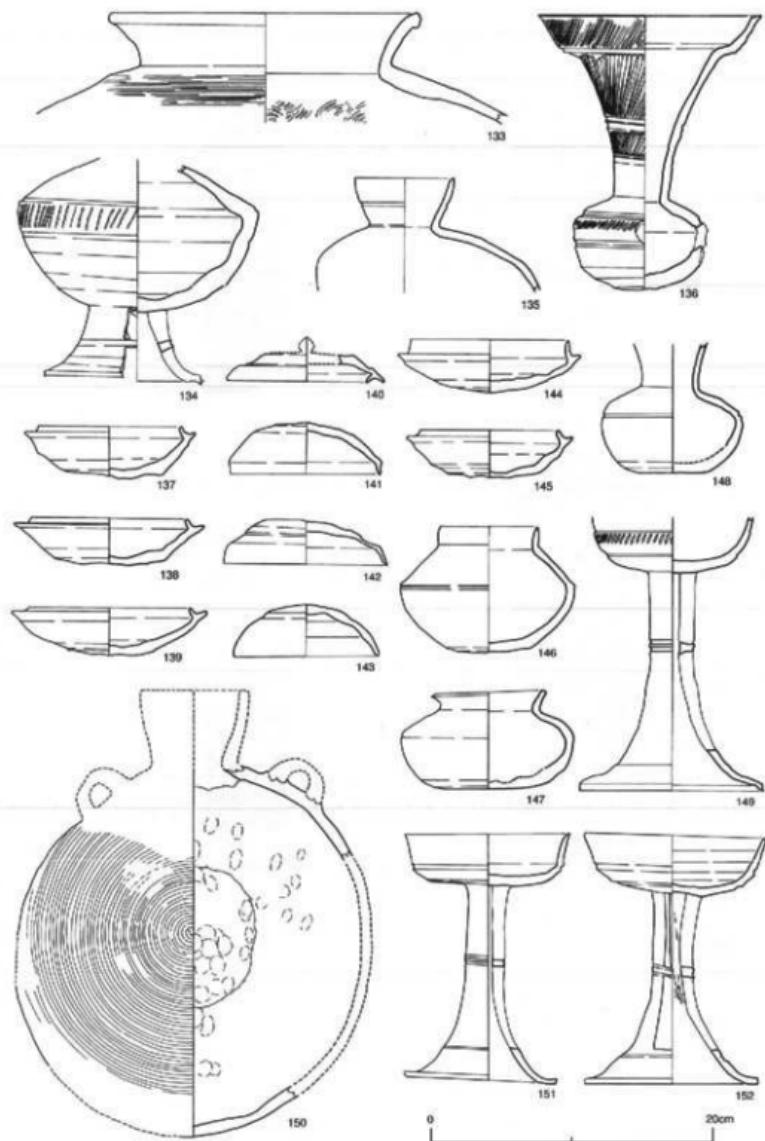
玄室の床面は、敷石の上に埋土とは土質の違う暗褐色粘土が5cm程の厚さでみられる。この粘土は、かつて調査された山畠26号墳や33号墳で敷石上に貼られた粘土床と同様のものであることから、本古墳においても石棺が置かれていたのは敷石上ではなく、この粘土床上と考えられる。玄室の敷石は、玄室中央部を境として北半部の敷石に大きい石が用いられ、敷石面の高さも南半部よりも高いという違いがみとめられる。これは、おそらく玄室北半部敷石の敷設が先行し、この部分に第1次埋葬が行われた後に、玄室南半部の敷石・貼床を施して第2次埋葬が行われたものと考えられる。石室内の各所より鉄釘が出土することから、第1次又は第2次のいずれかの埋葬は木棺による埋葬であったと考えられる。

遺物

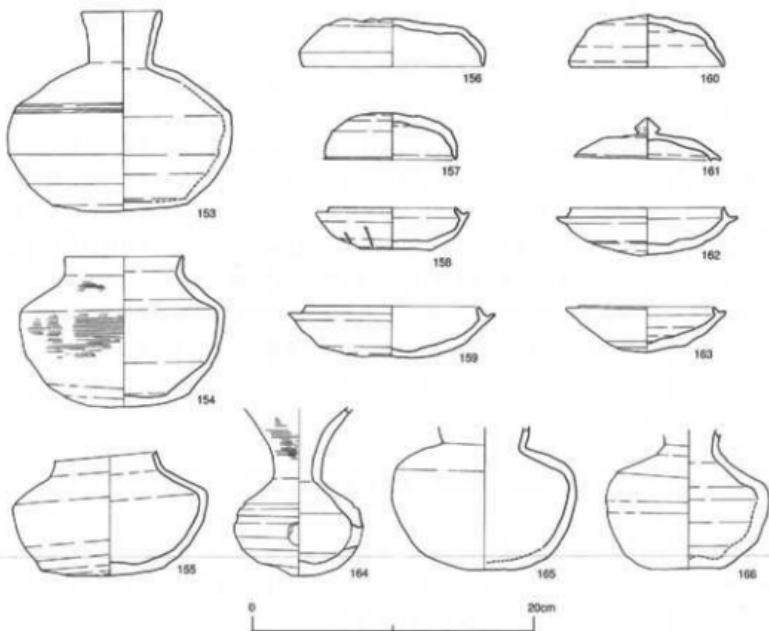
副葬品は、その大部分が失われており、床面上あるいは敷石の隙間に出土した遺物は奥壁沿いで須恵器杯117・脚台113・土師器碗126・127、玄室中央部で須恵器杯118、玄室南半部で須恵器の長颈瓶112・121・杯119・蓋122・壇123、袖部で須恵器蓋115・土師器碗124・鉄製鉗具



第16図 落ち込み内出土土器実測図 (1/7) 須恵器大甌・土師器甌



第17図 落ち込み内出土土器実測図（1/4） 須恵器壺・壺・杯・蓋・甌・塙・提瓶・高杯



第18図 包含層（客土）出土土器実測図（1/4） 須恵器壺・塚・蓋・杯・甌

120などをあげうる程度である。また、床面上の埋土を篩にかけて水洗した結果、ガラス小玉3個が検出された。

奥壁沿いで出土した土器のうち、須恵器杯117は口縁の立ち上がりが短く内傾する小型品。土師器塚126・127は赤橙色を呈する精製品で、126の内面に放射状の暗紋、127の内面には斜め方向の暗紋と放射状の暗紋が施されている。外面調整も丁寧で、126は上半を横方向のミガキ、下半をナデにより、127は上半を暗紋風の横方向のミガキ、下半を斜め方向のケズリが行われている。玄室南半部出土の須恵器長頸壺112は頸部で欠損しているが同一個体とみられるもの。121は口頸部の中程に細かな櫛描き波状文を施す長頸壺。蓋122は膨らみのない天井部の中心に宝珠形つまみをもち、口縁部の内側に僅かなかえりをもつもの。これらの土器は7世紀初頭のものと考えられる。玄室中央部出土の杯118は奥壁出土の杯にくらべて口縁の立ち上がりが上方に向かってやや長くのびる特徴から、6世紀後半のものと考えられる。杯119は6世紀中頃の特徴を有するが、他の出土品より時期が古く石室形式と一致しないこと、玄室床面より僅かに浮いた状態で出土したこと等から、混入品と考えられる。

袖石横より出土した鉢具120は幅4cm前後の帯を装着した馬具の一部とみられるものである

が、他に馬具の部品は検出されなかった。

3) 山畠25号墳丘内の竪穴式小石室

遺構

山畠25号墳の横穴式石室の東3.7mにおいて、墳丘を掘り込んだ長方形の墓壙内に構築された竪穴式石室を検出した。この小石室は、四周に一辺0.2~0.5mの石を積上げ、床面に敷石をもつもので、南北1.6m・東西0.8mを測る長方形の平面プランを呈する。この石室の主軸方向は山畠25号墳の横穴式石室とほぼ同じN30°Eを指す。石積み上部はもとは天井施設が存在していたとみられるが、山畠25号墳の墳丘が削平された際に同時に削られたものと思われる。

石室の床面より鉄釘が出土し、木棺の使用が知られる。この小石室の築造は出土遺物より7世紀前半と考えられるが、これは墳丘を共有する25号墳で最後の追葬（第4次埋葬）が行われた後、横穴式石室内に追葬スペースがなくなったことにより、さらに追葬するために小石室が構築されたと推定される。

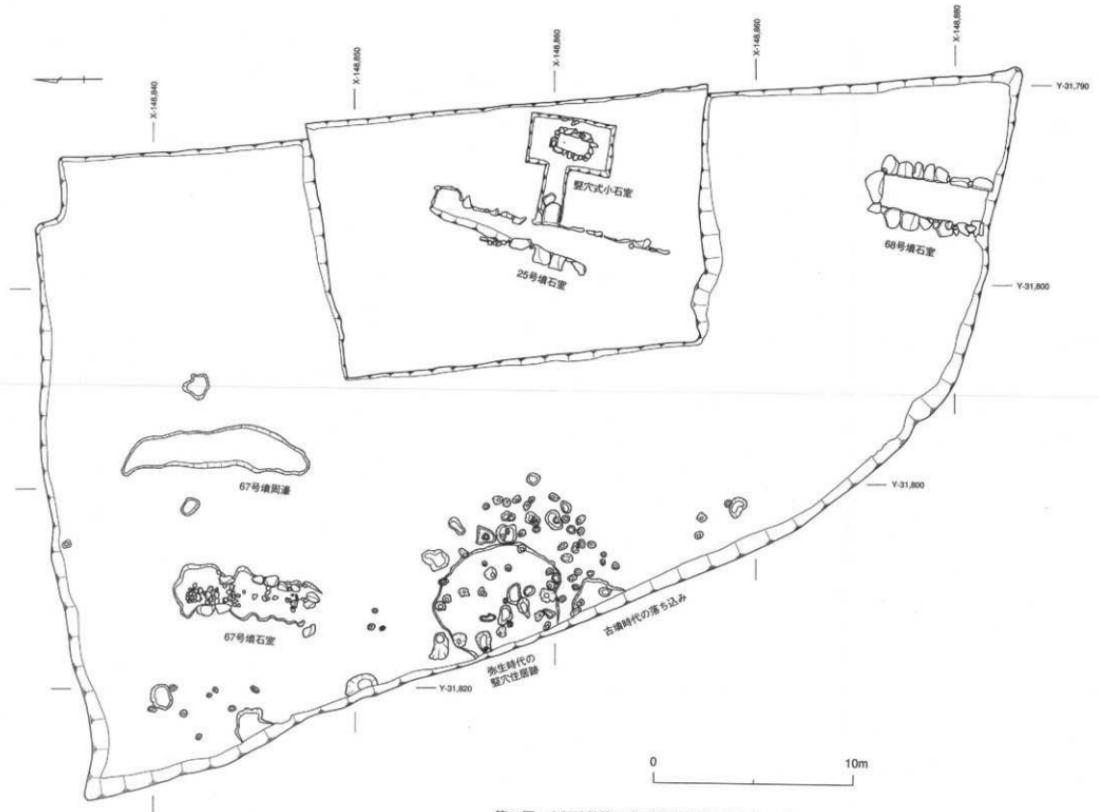
遺物

石室中央の床面より須恵器の短頸壺110・無蓋高杯111・鉄製刀子109が出土した。これらは石室スペースよりみて木棺内副葬品とみられる。短頸壺は扁球形の胴部より短い口頸部が立ち上がる形態で、口径4.7cm・胴部最大径11.2cm・器高10cmを測る完形品。無蓋高杯は脚柱部より裾部が「ハ」の字形にひらく脚部をもち、杯部は平坦な底部より口縁部が外反ぎみに立ち上がる。口径10.3cm・裾部径8.5cm・器高9.7cmを測る完形品。

4) 落ち込みとその出土遺物

弥生時代の竪穴住居跡のすぐ南において須恵器多数と土師質壺を含む古墳時代の落ち込みが検出された。この落ち込みは、西半部が市道下にのび未検出であるが、南北は現状で約5m・深さ0.4mを測るものである。出土遺物に完形品が多いことから、これらの土器を集積した遺構とみられるが、その性格は明らかではない。

この落ち込み内からは、須恵器の大甕128~131、土師質の甕132等の大型品のほか、須恵器杯137~139・144・145、蓋140~143、壺146~147、台付壺134、甕136、無蓋高杯149・151・152、提瓶150等が出土した。このうち大甕131は焼き歪みが著しい不良品で、貯蔵の実用に耐え得るかどうか疑問視されるものである。土器質の甕は角状把手と曲げ底をもつ移動式のもの。上部の開口部分周縁に須恵器甕の胴部内面にみられる同心円文を有する当て具を押し当てる痕を残している。この甕が須恵器製作工房において製作されたことを示すものである。その他の須恵器では、杯144を除いて杯は6世紀末~7世紀初頭の型式で、蓋・甕・高杯・提瓶・壺なども同様の年代を示している。



第19図 山畠遺跡第15次調査地遺構平面図 (1/200)

III まとめ

山畠遺跡第15次発掘調査の結果、次のような知見が得られた。

1 標高87mの高所より弥生時代中期末の円形竪穴住居跡が1棟検出された。山畠遺跡においては完全ななかたちで検出された住居跡としては、はじめての例となるものである。この住居跡は、土石流段丘上にあって地表に多数露出している巨石を取り除きながら竪穴を掘削したものである。竪穴住居構築に不向きな土地をあえて選択し、多大な労力を傾けて構築したこの住居から、河内平野を見下ろす眺望はよいが水田經營には不向きなこの地に、あえて住居を営むだけの特殊な社会情況の存在が伺われる。

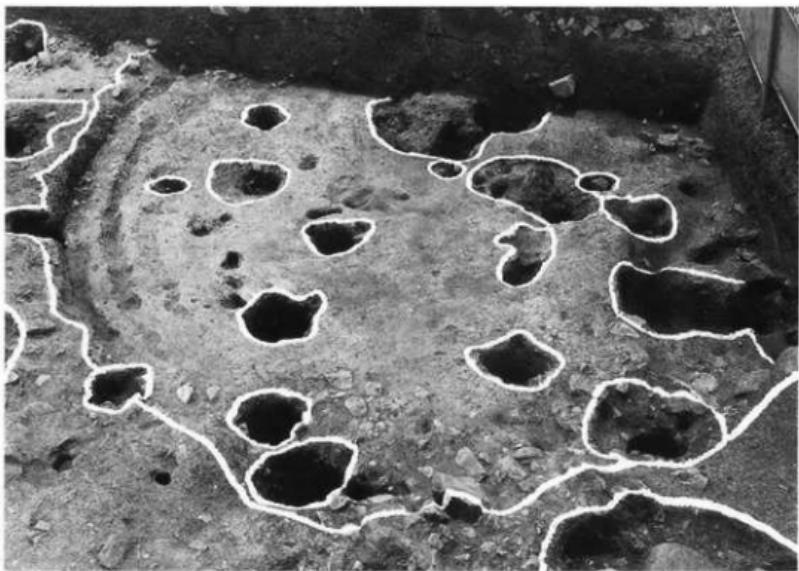
2 竪穴住居跡は、柱穴の分布の重なりよりみて何回か建替えられたことが知られる。但し、出土土器から見るかぎり、本調査地において住居が営まれた期間はⅣ期のなかにおさまると考えられる。従前、山畠遺跡は出土土器に凹線紋のみを施したものがないとの理由で、第Ⅲ様式(新)とみられていた。しかし、今回出土土器に凹線紋のみを施すものが含まれること、また生駒西麓の第Ⅳ様式壺や鉢には櫛描紋のみを施すものが多いという事実も知られてきたこと等から、従前知られていた出土土器についても第Ⅳ様式とみるのが妥当と思われる。

3 弥生時代の出土遺物のなかには、収穫具である石庖丁や大阪湾沿岸で使われたとみられる飯蛸壺が含まれている。石庖丁は、山畠遺跡の住民が普段は農作業に参加していたことを示すものであるが、西方の平野部まで下って農作業を行っていたのか、谷筋のかなり標高の高いところに自給できる程度の耕作地が存在したのかは今後の課題である。飯蛸壺については、生駒山麓の鬼虎川や西ノ辻等の遺跡でも僅かながら出土しており、今回の出土例を含めていずれも非河内産の胎土により製作されたものである。漁具としての使用環境からかけ離れたこの地において飯蛸壺が出土する意味についても今後の課題としたい。

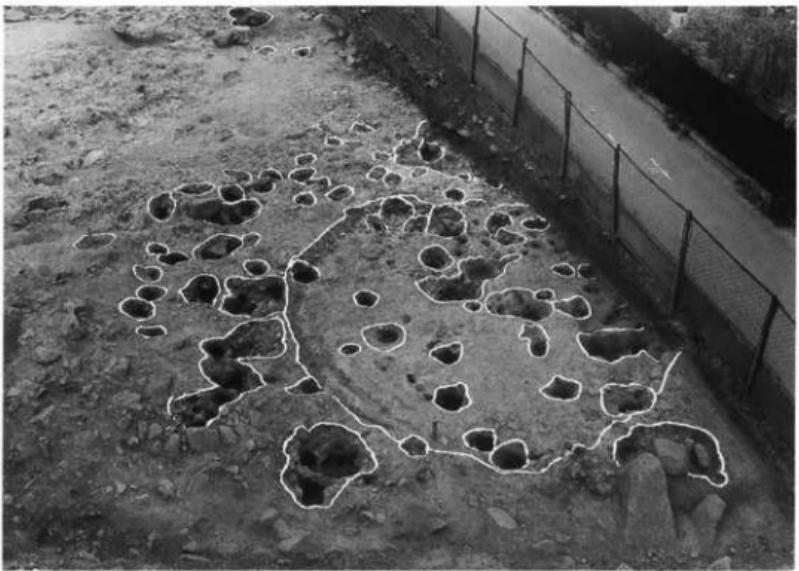
4 弥生土器の胎土については、角閃石を多量に含む生駒西麓産のものが大半を占め、底部(脚柱部を含む)382点中346点(90.6%)が西麓産、36点(9.4%)が他地域からの搬入品とみられるものであった。器種別にみると、壺では口縁部破片256点中231点(90.2%)が西麓産、25点(9.8%)が他地域からの搬入品。壺では口縁部破片217点中203点(93.5%)が西麓産、14点(6.5%)が他地域からの搬入品。鉢及び高杯では口縁部破片227点中212点(93.4%)が西麓産、15点(6.6%)が他地域からの搬入品。脚柱部では72点中65点(90.3%)が西麓産、7点(9.7%)が他地域からの搬入品である。各器種ともに90%を超える生駒西麓産土器の割合は、弥生中期後半(Ⅳ期)における河内平野の諸遺跡よりも明らかに他地域からの搬入品の割合が小さく、高地性集落の特異性を示すものと考えられる。しかしながら、同じ高地性集落である弥生後期の岩瀧山遺跡に比較すれば、搬入品の割合は大きいことも知られ、同様の立地環境にあっても土器にみられる地域間交流の活発な弥生中期と閉鎖的な弥生後期という大きな時代の特徴は認められる。

5 山畠遺跡がIV期末に消滅したのち、山畠遺跡と同様の環境に立地する岩滝山遺跡が南約800mを中心に標高60~100mの南北400m・東西200mの範囲に竪穴住居跡の分布をみると、この2遺跡の交替期は生駒西麓の平野~扇状地末端部で大規模な集落を形成していた鬼虎川遺跡の消滅と西ノ辻遺跡への再編時期と一致することから、平野~扇状地の集落と高地性集落の動向は密接なかかわりをもって推移したことが伺われる。

図 版



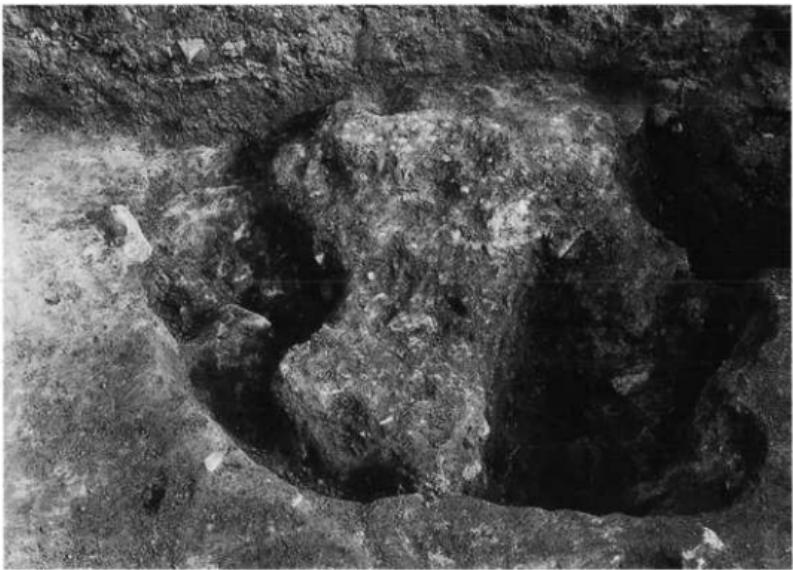
1. 円形竪穴住居跡（調査地北半部での検出状況・北より）



2. 円形竪穴住居跡及び周辺のピット群（北より）

図版2

山畠遺跡第15次調査
遺構



1. 円形竪穴住居跡の内部（北より）



2. 山畠遺跡第15次調査南半部全景（北より）



1. 山畠遺跡第15次調査北半部全景（東より）



2. 山畠67号墳石室及び周濠跡（南より）



1. 山烟67号墳石室床面全景（南より）



2. 山烟67号墳石室床面（遺物取上後・南より）



1. 山烟67号墳石室床面（北より）



2. 山烟67号墳石室床面（南より）



1. 山畠67号墳石室中央部の須恵器・土師器出土状況（東より）



2. 山畠67号墳石室南部の須恵器出土状況（西より）



1. 山畠68号墳玄室内の破碎された石棺材（南より）



2. 山畠68号墳玄室内の破碎された石棺材（北より）



1. 山烟68号墳石室及び周辺の土石流堆積物（北より）



2. 山烟68号墳玄室内北半部の敷石と南半部の粘土床（南より）



1. 山畠68号墳玄室全景（南より）



2. 山畠68号墳玄室全景（北より）



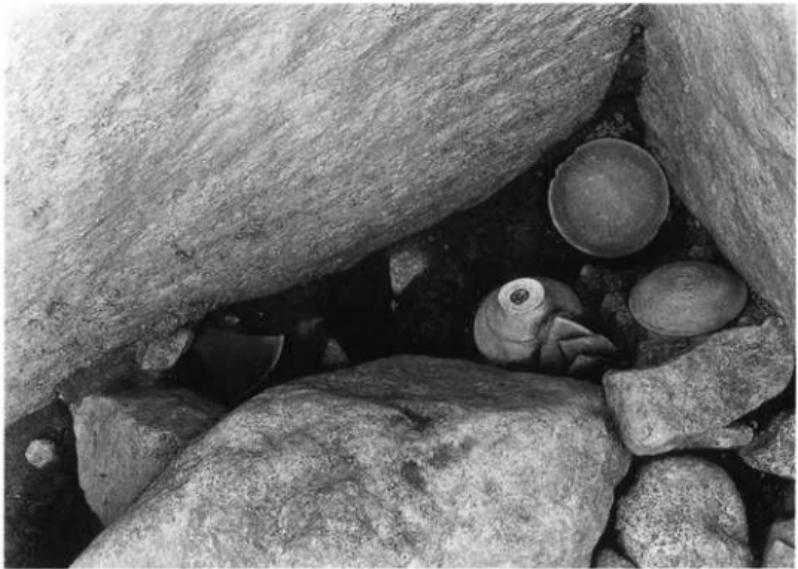
1. 山畠68号墳玄室奥壁と敷石（南より）



2. 山畠68号墳玄室西壁の石積



1. 山畠68号墳玄室東壁の石積



2. 山畠68号墳玄室北東隅の須恵器・土師器出土状況



1. 山烟25号墳丘内小石室全景（南より）



2. 山烟25号墳丘内小石室全景（東より）



1. 山畠25号墳丘小石室敷石上の須恵器・刀子出土状況



2. 調査地南西部の落ち込み内土器出土状況（南より）



25



23



167



168



89



14



16



15



12



13



28



24



170



169



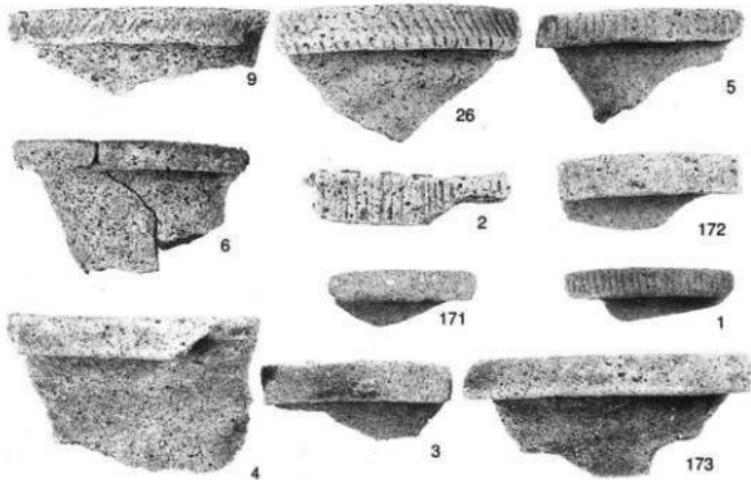
45



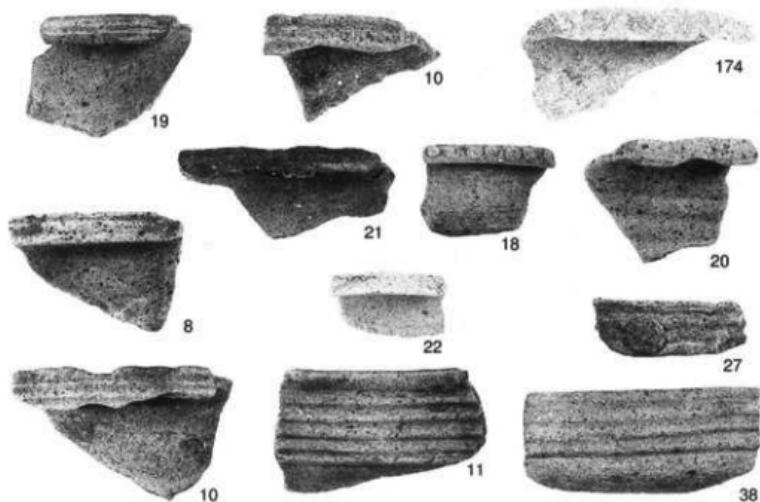
29



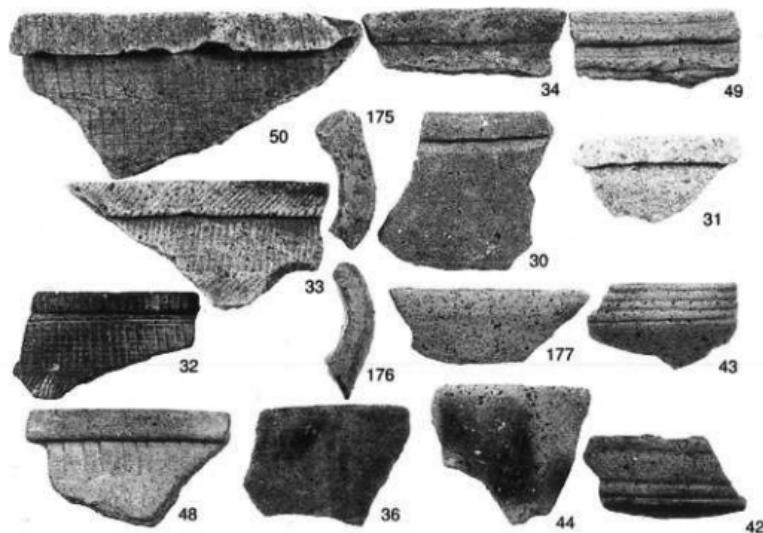
17



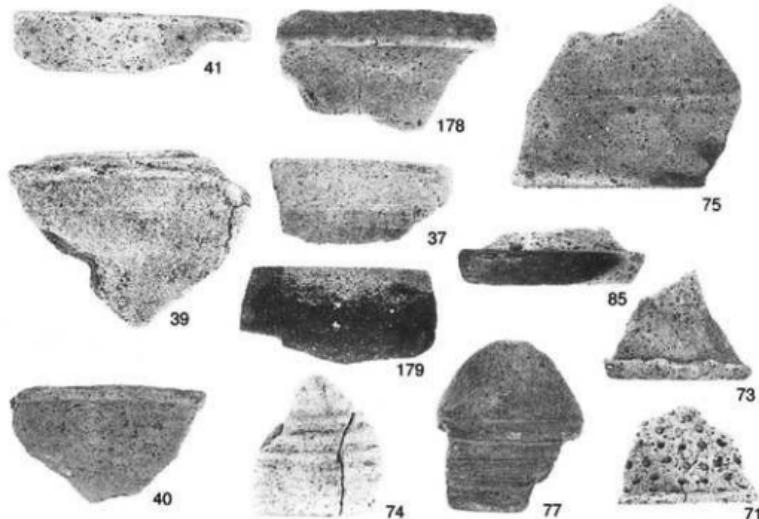
1. 茂生土器 壺



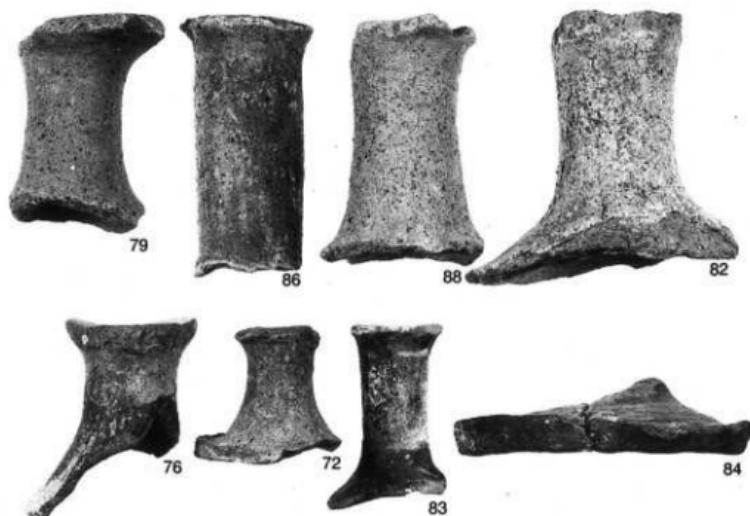
2. 茂生土器 壺



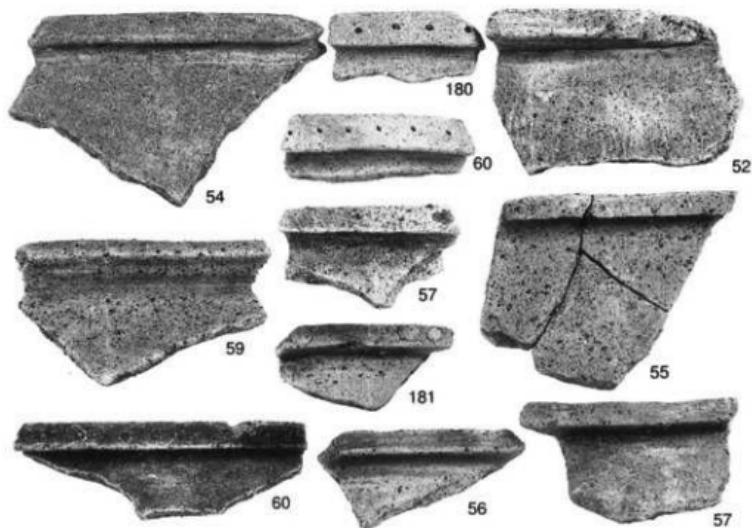
1. 弥生土器 鉢・高杯・把手



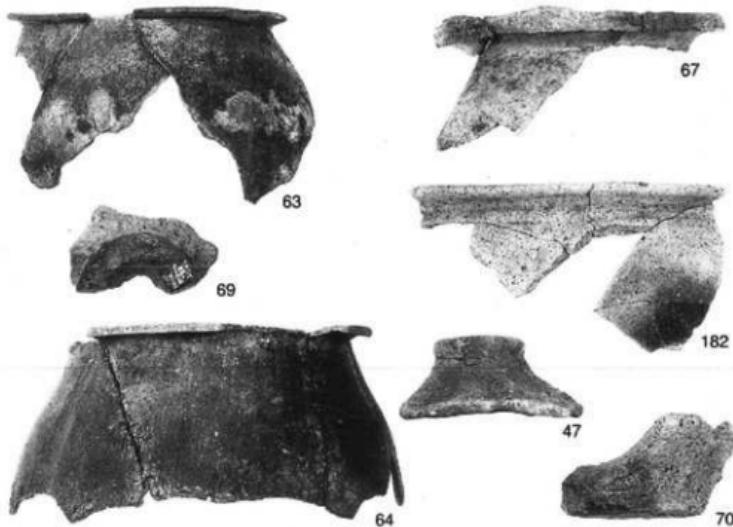
2. 弥生土器 高杯・脚台



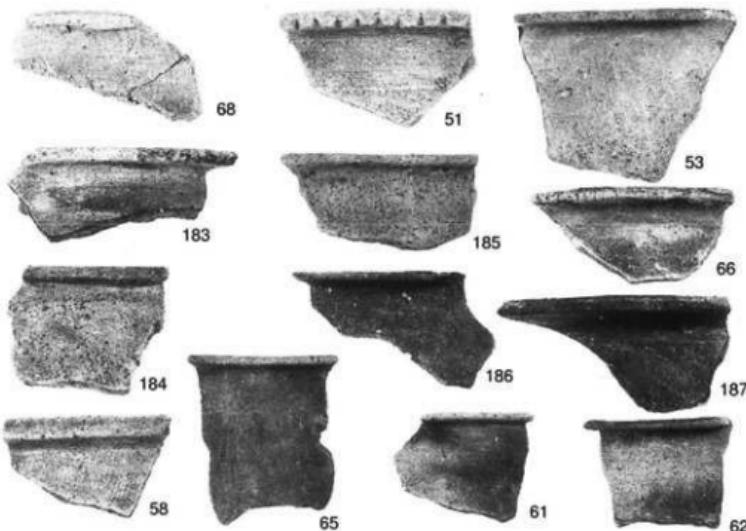
1. 弥生土器 脚台



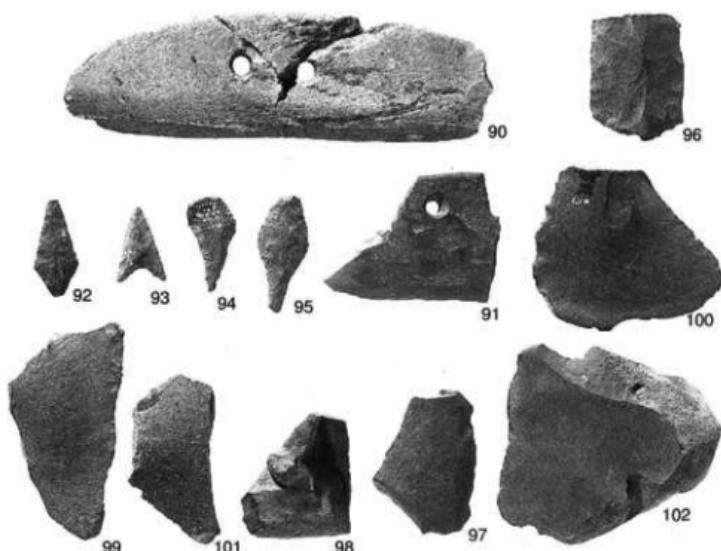
1. 弥生土器 壳



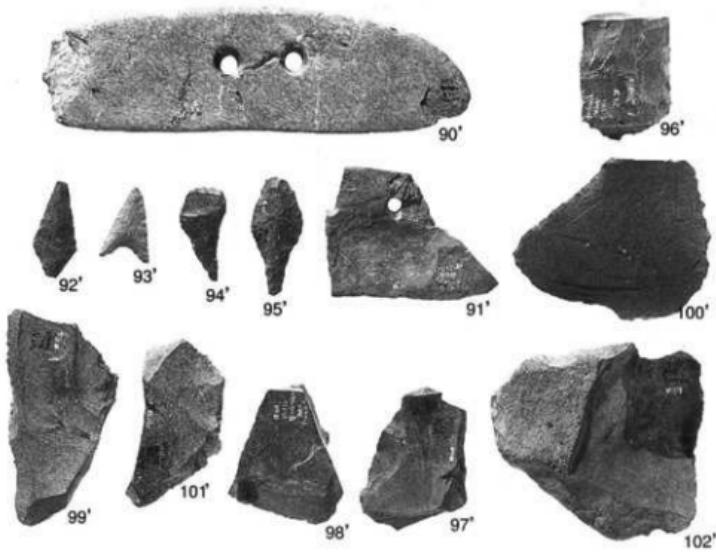
1. 弥生土器 壺



2. 弥生土器 壺



1. 石製品 石庖丁・石槍・石鎌・石錐 他



2. 同 上 (裏面)



105



106



107



103



108



104



119



120

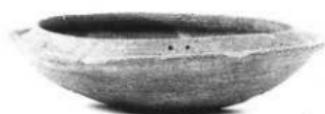
須恵器 蓋杯・壺・壺、土師器 盆、金環、鉗具



117



124



118



125



115



126



116



127



122



113

須恵器 蓋杯・脚台、土師器 梶



112



121



111



110



109



109'



132'



129



132



130



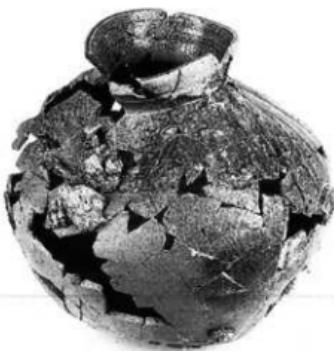
132''



188



128



131



151



152

須惠器 壺・高杯



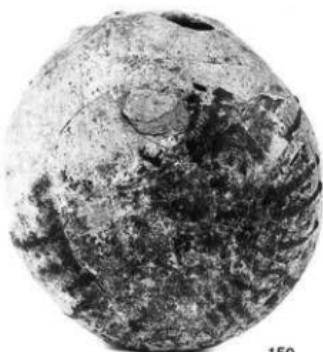
134

136



148

147



150



150*

須恵器 壺・甌・壺・提瓶



139



142



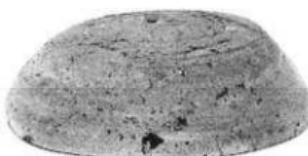
138



141



137



160



145



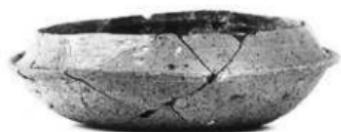
157



162



156



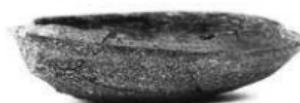
189



153



159



158



161



155



154



166



133



190



164



165



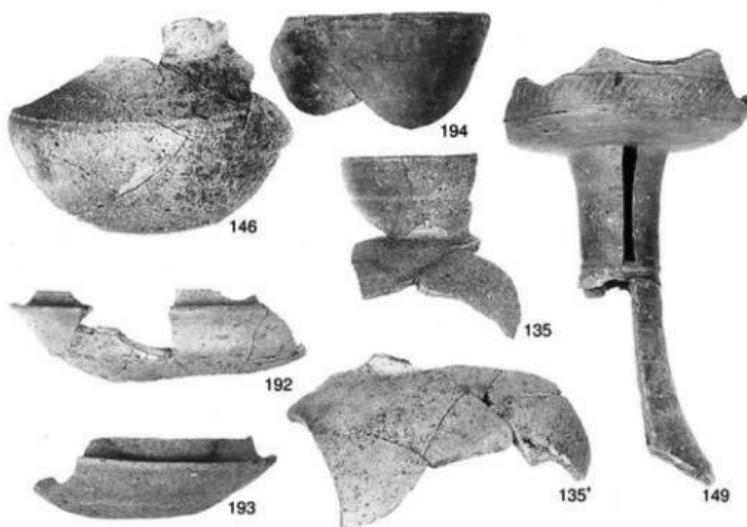
191



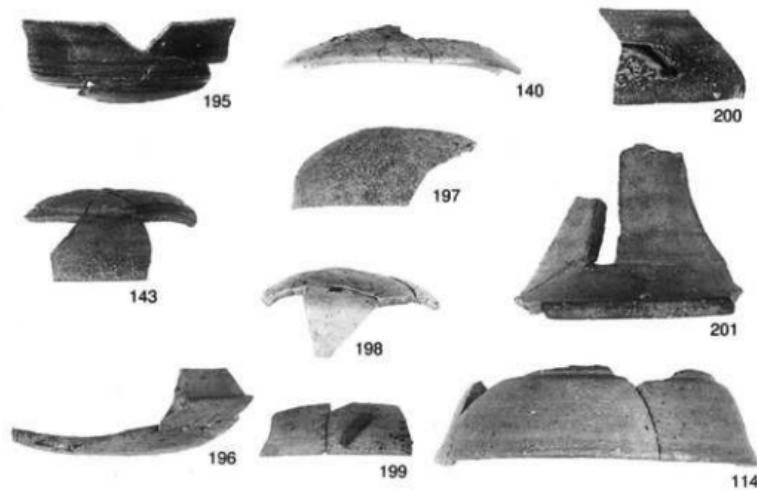
191'



191''



1. 須恵器 増・壺・高杯・蓋杯



2. 須恵器 蓋杯・高杯・脚台

報告書抄録

ふりがな	やまはたいせき						
書名	山畠遺跡第15次発掘調査概要						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	芋本隆裕						
編集機関	財団法人 東大阪市文化財協会						
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21						
発行年月日	平成11年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査要因
山畠遺跡 (第15次調査)	大阪府 東大阪市 上四条町2038	27227			19900424 19900801	約1,000	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落跡 古墳	弥生中期 古墳後期	弥生中期の 竪穴住居跡 横穴式石室 竪穴式小石室	弥生土器・石器 石庵丁・須恵器 土師器・鉄製品	<ul style="list-style-type: none"> •弥生中期の円形竪穴住居跡1棟を標高87mの高地で検出 •棚田下に埋没した横穴式石室2基を検出 •横穴式石室をもつ古墳の墳丘内より竪穴式小石室を検出 			

山畠遺跡第15次発掘調査概要

1999.3.31

発行 財團法人 東大阪市文化財協会

印刷 株式会社 近畿印刷センター